学位被授与者氏名	渡邉　くるみ（わたなべ　くるみ）
論文題目	学童保育で育まれる被受容感に関する研究 ―子どもの葛藤場面におけるかかわりに着目して―
論文審査結果の要旨	本研究は、子どもの被受容感に焦点を当て、学童保育の中での多様なかかわりを通して、被受容感がどのように育まれるのかを質的に捉えようとする仮説生成的な研究であった。 第１章・第２章では、筆者自身の強い問題意識を元に、放課後の子どもを取り巻く環境の厳しさや、地域や家庭での被受容感を育む経験や機会の乏しさについて言及し、さらには被受容感を育むための突破口としての学童保育についても、課題を提示しながら論を進めている。背景に筆者自身の子どもへの思いや学童保育現場への危機感があるからこそであり、それは強みでもあるのだが、一方で、問題意識が複数存在し、筆者特有の論理展開となっている点は否めない。もう少し体系的に先行研究を概観できると（あるいはそのためにももう少し問題の射程を狭めるなどした方が)、本研究の価値がより明確になったように思われる。しかしながら、多様な問題意識を包括しながらも、本研究の目的はきちんと定められており、評価に値すると考える。 本研究の醍醐味は、11 のエピソードの丁寧な記述とその分析にある。本質を失わないように何度も書き直されたエピソードは、臨場感を帯び、的確な分析へと繋がっていった。また、被受容感を育む「かかわり」を単体としてカウントするのではなく、きっかけとしての葛藤の生起場面から被受容感が育まれていくプロセス全体を一つの分析単位とするには、このエピソード記述の洗練は欠かせない作業となっていたと思われる。だからこそ、総合考察において「大人のかかわりによる被受容感」のみならず、「場自体が生み出す被受容感」、「子どものかかわりによる被受容感」といった、入れ子状の多層的な理解を導くことができていた。興味深い新たな知見だったように思われる。もちろん、質的研究そのものが有するエピソードの信頼性や分析の妥当性といった課題がないわけではないが、十分に説得力のある考察ができていたのではないだろうか。 課題としては、本研究で得られた知見を、他の学童保育の現場はもちろん、家庭や地域にどのように還元していくことができるのかといった言及が薄かった点が挙げられよう。例えば学童保育の支援員はまず何をすればいいのか、その具体性を本研究の知見に基づいて明確に指摘し、今後の道筋を示すことができれば尚良かったと思われる。また、被受容感や自己肯定感そのものの理解については、筆者自身の観点はそれなりに整理されていたものの、他の自己肯定感に関する理論との対話が不十分ではある。それらを今後の課題としたい。 2023 年 2 月 21 日に、北九州市立大学北方キャンパス 本館 D-303 教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士(人間関係学)として十分な内容であると判定した。